

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 65 号

2012 年 12 月

日本薬史学会2012年会(東京)開催報告

日本薬史学会2012年会が2012年11月17日(土)、東京大学薬学系総合研究棟2階講堂で午前10時20分から開催された。津谷喜一郎年会長の開会挨拶に引き続き、口頭発表による一般演題16題、および年会長講演、特別講演が行われた。曇天・雨模様のなか参加者は80名ほどに達し、各口頭発表に対してフロアーから活発な質疑が展開された。

年会長講演は、津谷年会長(東京大学大学院薬学系研究科特任教授)が「薬効評価の回り灯籠」と題し講演した。薬価評価の方法論の歴史を、「雨乞い三た論法」(1969)、砂原茂一による結核のRCT(1957)、朝鮮戦争時の京都での急性肝炎のRCT(1952)、英国のストレプトマイシンRCT(1946)、731部隊によるRCT(1941)、高木兼寛による歴史対照を用いた比較試験(1982-84)に対する森林太郎の批判へと辿ったうえで、一方では80年代後半からは患者が薬効評価の方法論に発言を始め、また「物語に基づく医学」(narrative based medicine: NBM)が興隆したことを紹介し、雨乞いにも一定の意味が見い出されるようになった歴史を興味深く論じた。

また特別講演は、雷祥麟博士(台湾・中央研究院

近代史研究所)が「漢医学研究の研究戦略—1920年代台湾における杜聡明の医学思想—」(日本語訳)と題し、英語で講演した。そのなかで同博士は、台湾からの留学生として日本で初めて博士号を京都大学で取得した杜聡明の医学思想や、漢医学研究の方法論としての54321と12345の逆戦略などについて述べ、フロアーからも多くの質疑が出され、活発な議論が展開された。

すべての口頭発表が予定通り終了した後、次回の日本薬史学会2013年会会長・高田昌彦先生(北海道支部長)から「2013年10月5日(土)に札幌市で開催します。一番よい季節ですので多数のお出でをお待ちしています」との挨拶があった。フロアーからは大きな拍手で応えた。

この後、津谷年会長より閉会の挨拶があり、2012年会は18時前、盛会裡に閉会した。引き続き、生憎の強い秋雨のなか会場を移し、東京大学内の伊藤国際学術研究センターレストラン「カメラリア」で懇親会が開かれた。前薬史学会会長・山川浩司先生の乾杯で賑やかに始まり、20時近くに終了した。

日本薬史学会賞および日本薬史学会奨励賞の受賞者決定

2012年度第2回理事・評議員会は11月17日12時10分から東京大学内の伊藤国際学術研究センター

で、津谷喜一郎会長の議長により開催された。

理事会では、2012年度の薬史学会学術賞受賞者

を次の各氏に決定した。(詳細は薬史学雑誌第47巻第2号(2012)を参照のこと)

1) 日本薬史学会賞

奥田 潤氏(名城大学名誉教授)
受賞研究「薬師如来とその薬壺の史的研究」
高橋 文氏(日本薬史学会)
受賞研究「18世紀の日本と欧州の医学薬学、植物学を結びつけたC. P. ツェン

ベリーに関する研究」

2) 日本薬史学会奨励賞

柳澤波香氏(青山学院大学兼任講師)
受賞研究「アポセカリを中心とする英国医薬史の研究」
授賞式は、来年2013年4月に開催予定の日本薬史学会総会時に行われる。(高橋氏の受賞題目は一部文言が変更される可能性があるとのこと)

日本薬史学会2012年会の聴講報告

荒木二夫、砂金信義

口頭発表16題について傍聴したので、その講演要旨を報告する。各発表とも興味を惹く内容が多く、フロアーからの質疑も活発に行われた。

一般講演

No.1 演題：漢方処方における薬用量と調製法の関係 —多味剤と大剤について—

演者：鈴木達彦・東京理科大学、北里大学東洋医学総合研究所

要旨：漢方処方における「大方」をWHO/WPRO用語集では、大用量(大剤)もしくは多種類の構成生薬による方剤(多味剤)としている。「大方」は成無己の「七方」中にみられるが、「七方」は処方の性質を示すものであり、「大方」を薬用量あるいは薬味(構成生薬の数)を基に「大剤」と「多味剤」に定義することは曲解である。一方、「緩方」と「急方」では、それぞれ、薬味が多く、用量が少ないものと、薬味が少なく、用量が大きいものとして、薬用量と構成生薬の数を相関させて処方の性質を定義している。

No.2 演題：石見銀山「いも代官」井戸平左衛門と医師・中嶋見龍および錦織玄秀「診察録」について

演者：成田研一・島根県薬剤師会江津・邑智支部
要旨：石見銀山「いも代官」として知られる井戸平左衛門正朋は、飢饉に際し許可なく年貢米を放

出したことの咎として自死したと語り継がれているが、「錦織玄秀診察録」によれば、平左衛門の晩期には病を得て各所の医師から診療をうけ、玄秀も治療に当たるが、「辞而不治、四診皆悪症」として治療を断念したと記載されており、その死因は「病死」であったとしている。

No.3 演題：明治時代の局方における「錠」の日本名とラテン名

演者：五位野政彦・東京海道病院薬剤科
要旨：日本薬局方に収載される「錠」のラテン名を、英国、ドイツ、オランダの薬局方と対比させ、その変遷を追求している。錠剤は、明治初期の英国局方を範とする『海軍薬局方』に「トロキサキユス」として収載され、その後の『日本薬局方』には収載されるが、ラテン名の表記は時期により変遷しており、「錠剤」の定義も変遷していることも明らかにしている。

No.4 演題：事業構造から見る血漿分画製剤市場の歴史の変遷

演者：坂上裕一郎、津谷喜一郎・東京大学薬学研究科医薬政策学
要旨：血漿分画製剤の市場動向を「収率」という概念を導入して、血液凝固第Ⅷ因子、アルブミン、ヒト免疫グロブリンについていずれが主製剤の役割を担っていたのかを時系列を追っ

て解析すると、第Ⅷ因子からアルブミン、グロブリンへと変遷する。これらの変遷を通して事業構造の解析を試みている。

No.5 演題：新渡戸稲造と星一の交流

演者：三澤美和・日本薬科大学

要旨：世界を駆けめぐり、時代を先駆ける星一と新渡戸稲造の出会い、病氣療養のため渡米し、滞在中「BUSHIDO The soul of Japan」を執筆した新渡戸を、米国コロンビア大学に留学中の星が創刊した邦字新聞で取材したことに始まる。パリ、台湾など諸所で、時間を超えてその後も続く親密な交流を明らかにしている。

No.6 演題：星薬科大学に保存されていた国内初のキナ栽培に関する一次資料

演者：南雲清二・日本薬史学会

要旨：星薬科大学史料編纂室に所蔵されていた国内初のキナ栽培に関する一次資料2点(栽培事業に関わる文書集ならびに植え付けの作業日誌)の発掘とその意義ならびに、所蔵に至る顛末を述べている。

No.7 演題：薬物学書に見る消化性潰瘍治療薬の歴史の変遷

演者：大谷聡子、海保房夫・東京理科大学薬学部

要旨：明治以降に発行・使用された薬物学書に取り上げられた消化性潰瘍治療薬の歴史の変遷を検討している。制酸薬が主として用いられた明治～昭和20年代、抗コリン剤が主流となる昭和30～40年代、H₂ブロッカーが登場する昭和50～60年代、プロトンポンプ阻害薬が開発された平成年代(1991年以降)を概略しているが、教科書を通じた追求の限界にも言及している。

No.8 演題：近代西欧医・薬学発祥史 第9報 薬物有効成分の単離と特定

演者：辰野美紀・日本薬史学会

要旨：演者は、フランスにおける臨床医学の誕生に果たす臨床薬学活動の役割を追求しているが、本演題では臨床医学の誕生、病理解剖学の導入と続く流れの中で、概念として捉えられていた薬用植物の生理活性成分を、生体実験を通して目に見えるものとして単離し、「不可視」を「可視」化した臨床薬学者(薬剤師)による事象が成立した時代構造に迫っている。

No.9 演題：Drug Information (DI), Clinical Pharmacy (CP), Pharmaceutical Care (PC)が日本の薬学に与えた影響

演者：赤木佳寿子・一橋大学大学院社会学研究科

要旨：DI, CP, PCの歴史的な動きについて、わが国の薬剤師業務のあり方、薬学教育6年制への移行、医療薬学の実践、健康保険点数の設定等行政への影響などを検討した。今後の薬剤師活動は、チーム医療の一員となりヒトのケアにあることが論ぜられた。

No.10 演題：わが国における医薬品開発30年史 —キラル医薬品について—

演者：榊原統子・日本医薬情報センター

要旨：日本オリジナルの新薬は世界の1/3から1/4を占めていたが、低分子化合物が多く、その半数はキラル(光学活性)医薬品であった。近年の趨勢は、神経系/感覚器官系、抗体医薬品の開発にあり、わが国についてもこの分野での新薬創製が期待されている。

No.11 演題：緊急安全性情報の歴史

演者：高橋春男・日本医薬情報センター

要旨：緊急安全性情報の作成基準の改訂の変遷、配布された情報の内容の分析が報告された。1987年の制度発足以来20年間で49件が発出されたが、発売後1年以内の新薬が約20%に対し、10年以降のものでは約40%となっている。2007年の「オセミタミビル(タミフル)による異常行動」以降の発出はない。

No.12 演題：日向薬事始め（その14）一日向における種痘の歴史一再考（Ⅱ）

演者：山本郁男・前九州保健福祉大学薬学部

要旨：わが国の種痘の初回接種は、嘉永2年(1849年)7月長崎でなされたとされているが、演者は大悟法氏の文献により、同年3月日向で行われたと推定した。討論では、この史料の記述の真偽について更に客観的に確認する必要があるのではないかと問題提起された。

No.13 演題：清代・民国期重慶の薬材流通

演者：石川 晶・学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻

要旨：中国南西部の都市、重慶は長江沿いに位置し、清代・民国期には物流の拠点として栄えた。薬材商人は、同郷組織を形成し、卸売り中心の字號業、倉庫・仲介の行棧業、店頭での小売販売の鋪戸業などの流通、販売システムが確立されていた。

No.14 演題：ユダヤ人と薬一西フランク王に仕えたユダヤ人医師を巡る問題一

演者：田中玉美・名古屋大学大学院文学研究科

要旨：西フランク王・シャルル2世は、877年イタリア遠征の途中熱病に倒れ、侍医のユダヤ人セデキアスの薬を服用したが死亡した。これはユダヤ人による毒殺だとしたキリスト聖職

者の記録について、演者はユダヤ人に対する偏見に基づくものであると考えた。

No.15 演題：グラーツ(オーストリア)の薬局とSpital(救貧院)

演者：石田純郎・岡山大学医学部

要旨：オーストリア東南部の都市グラーツの中心部には、1535年設立の大鷲薬局を初め古い歴史を有するいくつかの薬局が現存する。1511年に薬剤師が働いていたという記録が残っている。病院は17世紀に創設されたSpitalが起原となっている。

No.16 演題：1980年代の米国ワクチン産業：医薬品行政による政策転換

演者：ジュリア・ヨング・法政大学

要旨：研究開発に対する利益が確保されないこと、副反応に対する訴訟が増加したことにより、メーカーは撤退し、米国ではワクチン不足状態となった。ことの重大性に気づいた政府は、1980年代からワクチン行政の改革、法整備を図り、企業の参入インセンティブを整え、企業は混合ワクチンなどの技術革新とグローバル化によりワクチン生産が拡大した。わが国由来の新技术がグローバル化していること、停滞していたワクチン開発がわが国でも進行していることが討論された。

活発な日本薬史学会2012年会を聴いて

編集委員 小清水敏昌

2012年11月17日(土)今にも雨が降りそうななか開催された。受付の混雑から開始時間を10分ほど遅らせてスタートした。会場は東京大学薬学系総合研究棟2階の講堂。口頭発表16題、会長講演、特別講演各1題と盛り沢山であった。また昼休みを利用して理事・評議員会議が伊藤国際学術研究センター3階中教室で行われた。

私は最近入会したもので、伝統ある本学会年会に

は初の参加であったが、特に感じたのはフロアーからの質問が多く出され、活発な議論が展開された点である。時間をオーバーしても更に質問が出たほどであったが、途中でカットせざるを得ずもう少し時間があればと思った。

津谷年会長講演が始まったのが11時20分で予定よりかなり遅れていた。座長は北海道支部長の高田昌彦先生。演題は「薬効評価の回り灯籠」で、演題

のとおり講演中に綺麗な色とりどりの灯籠のスライドが沢山現れてとても印象的であった。テーマである「薬の効果の評価」は永遠のテーマではないかと思われる。その時代毎の学会の考え方、行政の考え方、副作用発生の原因など様々な場面があると考えるが、現代では一定の科学的方法にて評価している。

講演では、明治時代初期の頃から振り返って「評価」の歴史を辿り、近代における評価の考え方について一連の出来事も交え語った。日清・日露戦争における当時のわが国の軍隊における「脚気(かっけ)」の発生原因を巡る高木兼寛と森鷗外との考え方、フィッシャーの統計学、砂原茂一による抗結核薬の評価方法、近年のEBMを提唱したSackett教授やコクランのライブラリー。薬効評価というと著名な「3た論法」があり、使った、治った、だから、効いた、という考え方で、rain dance (雨乞い)にも通じる。昔からの評価に関する様々な考え方を一通り解説した講演で、短時間でこうした内容を改めて学んだ意義があると思った。更に、「有効」のエビデンスのないことは「無効」なことのエビデンスではない。近年では市民・患者が医療において声を出すようになり、その声の「場」の理解がわれわれには必要ではないか、として講演を終えた。

このテーマに関連する学問領域において、「臨床薬理学」を軽くみる風潮が日本の医師のなかにあると筆者は思う。大きな副作用問題が生じると、その必要性を声高に言う識者がマスメディアに登場するが通常ではそれほど重要視していない。その根拠として全国の医科大学に「臨床薬理学」の講座は数えるくらいしかないのが現状である。米国には、その領域での著名な教科書が多く出され、版が重ねられているくらい確固たる信頼のある学問として広く評価されている。会長講演を拝聴して、本テーマの奥深さをいろいろと考えさせられた。

会長講演終了後に、理事・評議員合同会議へ行くため会場の外に出たところ、かなり激しい雨と寒さでビックリ。しかし、会場の研究センター3階は静かで暖かい雰囲気の中かで合同会議が行われた。

学会後半は特別講演から始まった。座長は京都大学の伊藤美千穂先生が務め、演者は台湾・中央研究

院近代史研究所 雷祥麟先生。演題は「漢医学研究の研究戦略—1920年代台湾における杜聰明の医学思想」。配布された英文の講演内容を読みあげる形で行った。会場からの質問も多くは英語で行なわれた。杜聰明は1893年台湾で生まれ、台湾人として初めて医学博士を日本(京都大学)で取得、その後1946年に国立台湾大学病院のトップとなった。日本の植民地時代に2回ほど“漢方医学の病院”の設置を提案したことがあり、真偽は分らないが、伝えられるところでは東アジアの伝統的な“非科学的”な漢方の病院の必要性をずっと考えていた由。

演者はこの杜の研究の試みは4つ範囲にしばられるとして、“実験的治療”を考えたこと、それを伝統的な東アジア医学の研究への応用、研究指向の病院を創設しようとしたこと、逆の指示方法論(54321と12345)を用いて人を対象とした臨床試験を開始したこと、そのため科学的かつ倫理的な規範を侵害するとして広く批判された、など杜の業績を語った。

16演題全てが終了したのが午後6時に近かった。次年度2013年度の年会長である北海道支部長 高田昌彦先生から挨拶があり、来年は北海道としては2005年に次いで2回目の年会を、あまり寒くならないうちと考え10月5日(土)に札幌で開催するので大勢の参加をお願いしたいとの期待を込めて述べられた。最後に年会長・津谷喜一郎先生から閉会を宣言し無事に全日程が終了した。

その後、雨の中を場所を移して伊藤国際学術研究センター1階のレストラン「カメラ」で懇親会が開かれた。終了する午後8時ごろまで久しぶり会った者同士が楽しく語り合っていた。



北海道支部だより

北海道医史学研究会・日本薬史学会北海道支部

第7回合同学術集会（報告）

北海道支部 関川 彬

はじめに

「北海道医史学研究会」と「日本薬史学会北海道支部」は医・薬の歴史を学ぼうと毎年合同学術集会を開催し、今年は10月13日（土）北海道医師会館において開催されました。今回は第7回目となります。集会に関わる業務は、両団体が1年おきに担当します。開催にあたり、北海道医史学研究会の島田保久代表幹事、日本薬史学会北海道支部の高田昌彦支部長の挨拶がありました。

特別講演

特別講演は、北海道史研究協議会の高木崇世先生から「近世蝦夷地図の変遷」を伺いました。近世の蝦夷地図は松前藩の成立と共に誕生したといえるが、現存はしておらず、現存するものとして1644年の幕府による事業によるものが最古とされています。しかし、その図形は現在の北海道とはほど遠いものでした。多くの商人や漁民が渡海するようになり、民間でも色々な蝦夷地図が作成されたが、1781年以降に幕府による調査で現在の北海道地図に近いものが作成され、最上徳内、近藤重蔵、間宮林蔵などの探検家が功績をあげ、幕末には松浦武四郎らにより優れた蝦夷地図、カラフト島図が作成されました。1948年以降は数多くの地図が出版されました。

一般講演

一般講演としては、以下の5演題が報告されました。

- (1)永野正宏（北海道大学大学院文学研究科）：安政5年、北蝦夷地における種痘について
- (2)秦 温信・佐々木文章・吉田純一・松岡伸一・佐野文男（札幌社会保険総合病院）、島田保久（元町整形外科）、鮫島夏樹（旭川医科大学）：関場不二彦著『西医学東漸史話』にみられる甫筑国訓編「瘍府」について
- (3)鈴木重統（介護老人保険施設 愛里苑）：緒方洪庵と適塾に宿るフーフエラントの精神
- (4)佐藤麻莉（北海道大学大学院文学研究科）：寛政11年の蝦夷地採薬使
- (5)本間克明（株ファーマホールディング）：『衛生彙纂 尚薬必携』（明治10年）

おわりに

特別講演や一般講演は興味深いものが多く、発表時間が制限されているため、集会後の懇親会で引き続き討論が続いていました。今回は、初めて大学院学生による発表もあり、これからの若手の活躍を期待できる集会でした。今後、合同学術集会は医師や薬剤師だけではなく、北海道の医療に関わった先人達（歯科医、看護師、針灸師等）の足跡を広く研究したいとの声もあり、それらの分野の方達にも呼びかけ、集会の更なる発展に期待するものです。

東海支部だより

日本薬史学会東海支部総会と研究会を開催

東海支部長 奥田 潤

日本薬史学会東海支部総会・例会研究会を下記のように開催しました。

●総会

日時：2012年12月1日（土）13：00～14：00

場所：名城大学名駅サテライト（MSAT）

●第4回例会研究会

日時：2012年12月1日(土) 14:00～16:00

場所：名城大学名駅サテライト(MSAT)

名古屋市中村区名駅3-26-8

名古屋駅前桜通ビル13階

地下街ユニモール④番出口出てすぐ

Tel 052-551-1666

演者：1 越川次郎(中部大学)

「名古屋の売薬について」14:00～

2 加藤宏明(伊勢くすり本舗)

「伊勢参りと萬金丹」15:00～

連絡先 飯田耕太郎(名城大学薬学部)

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

Tel 052-839-2710 Fax 052-834-8090

E-メール iida@meijo-u.ac.jp

日仏薬学会が創立40周年記念寄稿集を発刊

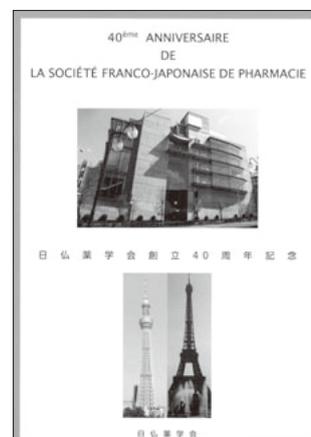
日本薬史学会名誉会員で故辰野高司先生のリーダーシップと日本・フランスの薬学関係者の尽力でスタートした日仏薬学会が創立40周年を迎えた。これを機に同学会副会長の儀我久美子先生(日本薬史学会評議員)や奥井登美子先生(同)が中心となって編纂された「日仏薬学会創立40周年記念」の寄稿集が発刊された。

日仏薬学会と日本薬史学会は関係が深い。日仏薬学会第3代会長に辰野先生が就任したのに続いて、第4代会長に竹中祐典先生(本学会理事)、第5代会長に奥田潤先生(同常任理事)が努めるなど、薬史学会会員の諸先生が日仏薬学会会員として活躍されていることは両学会にとって心強い。

寄稿集には、薬史学会に関係の深い諸先生が次のような随想などを寄せている。

竹中祐典「ある感想」および「日仏薬学交流40年」
「辰野高司名誉会長を偲ぶ」／奥田潤「私の日仏薬学

交流、フランスの薬学教育と日本独自の薬学」／奥井登美子「原発メルトダウンのリスクコミュニケーション」／儀我久美子「フランスとの出会い」／木村昌行「日仏薬学会創立40周年を祝す」／五位野政彦「刈米博士とフランス語」／辰野美紀「偉大なフランス! いけずなフランス!」／田引勢郎「チュニジアの思い出」／山田光男「キュリー夫人と放射能研究に殉じた最初の日本人研究者・山田延男」／辰野高司(唐津二郎)「フランスの薬学事情について」および「薬学概論の研究40年」などが掲載されている。



五史学会12月合同例会開催

年末恒例の五史学会(日本医史・日本薬史・日本獣医史・日本歯科医史・日本看護歴史)の合同12月例会が2012年12月8日、順天堂大学医学部11号館16階北フロアで午後2時から行われた。

当日の研究発表は、例年どおり各学会から1演題ずつ発表されたが、薬史学会からは西川 隆常任理

事が「MRの歴史～日本最初のプロパー誕生から百年」と題し、プロパー誕生の黎明期について発表した。そのなかで、1)プロパー誕生の背景、2)ドイツ人医師エベリングと日本人第一号プロパー二宮昌平、3)黎明期のプロパーたちについて述べ、プロパーの名称がMRに変わっても「情報提供」を通して自

社製品の普及、つまり「販売」を図る目的は、誕生した百年前から変わらない。そのため両者のバランスを如何に取るかが、今日の製薬企業とMRにも

引き継がれている永遠の課題であると結んだ。(五史学会12月合同例会の報告記は次号)

〔新刊紹介〕

秋葉保次、中村 健、西川 隆、渡辺 徹 編集

「医薬分業の歴史—証言で綴る日本の医薬分業史」

(株)薬事日報社 発行 B5版 695頁 平成24年1月刊 定価7,980円(税込)

医薬分業は、現在かなりの進展が見られている。しかしながら、その歴史的な面については断片的にしか知らないことが多いのではなからうか。本書は、医薬分業を血みどろになって戦った先人たちの足跡が生々しく感じられる貴重な成書であり、なかなかの労作である。編集に携わった中村健氏は本学会評議員、西川隆氏は常任理事であり、上梓するまで3年有余を要したという本書は、資料編を含み6部から構成されている。

第1部 医薬分業の萌芽と政治闘争、第2部 医薬分業法の法的整備の夜明け、第3部 分業法の制定から分業元年まで18年間の道のり、第4部 分業元年以降の医薬分業、第5部 回想・証言・インタビュー追録、第6部 資料。医薬分業については明治7年に明治政府が医療関係の規定を作った「医制」のなかに示されているのが始まりである。本書はその当時のことからスタートし、最近までの137年間の動向を纏めている。特徴的なことは、その当時、分業に係わった人たちの想いが「証言」「回想」として纏められていることである。そこには、既に鬼籍に入った方や存命されている方の貴重な証言や回想がある。とりわけ、吉矢佑元日薬会長の最後の寄稿原稿が収録されている点も貴重である。もちろん、当時のメディアに掲載された記事(主に薬事日報)も再掲載されている。

「分業元年」という言葉があるが、人それぞれに分業に係わった時代での経験からその解釈が異なるこ

とを、本書によって知った。本書では3つの通過点における解釈によって論じているのが象徴的で、それだけ医薬分業に長い歴史と激動の経緯があったと云えるのであろう。

これらを一読すると、その時その時の政治の動き、行政官の思惑、あるいは医師会や薬剤師会の考え方などが絡み合っ、少しずつ分業が進んでいったことが良く理解できる。これだけの過去の膨大な記録を収集し、コメントを加え、人選した証言者に語ってもらうなどの作業を進めるのには、膨大な時間と労力を要したことに違いない。本書を編集した方々の熱意や使命感などが伝わってくる。薬史学の立場からも興味を引く貴重な内容となっている。索引も医薬分業に係わった人たちが大勢(約600人)いることから、事項別のほか人名からも引けるよう配慮されている。

本書は、医薬分業についての歴史的な経緯や法的な位置づけなどの資料として、全国の薬剤師会はもとより、薬科大学で薬剤師教育に係わる教員・研究室や薬系大学図書館に常備すべき書籍である。

(小清水敏昌)



〔新刊紹介〕

高橋京子・森野薫子 著

『森野旧薬園と松山本草 薬草のタイムカプセル』

大阪大学総合学術博物館叢書 7

大阪大学出版会 2012年3月刊

薬草園の管理は大変な仕事である。薬草は樹木と違って、ほっておけば雑草に侵食されるし、毎年のように種を蒔いたり採ったりがある。それが私立薬草園として、江戸時代から今日までとは、苦労はひとしおである。共著者の一人、森野薫子さんの「あとがき」には、伝統ある森野旧薬園を支える苦労が滲み出ているが、課題も見逃すことはできない。

森野旧薬園は享保14年(1729年)に森野通貞が創始した。森野家の本業は吉野葛の製造販売で、それは今日も連綿と続けられていて、森野旧薬園は吉野葛とは切り離せない関係にある。本書では吉野葛そのもの、製造の歴史にも触れている。しかし、本書はその苦労話を綴った読み物ではない。あくまでも生薬学の学術研究書であり、大学の博物館シリーズということもあって、一般読者をも対象として、読

みやすさ、見る楽しさが配慮されている。

森野旧薬園所蔵の松山本草の図譜が旧薬園の原植物とともに30点余がカラーで紹介され、その解説、植物の生態などには高橋先生の本領が発揮されている。門外不出の図譜をこのような形で鑑賞、観察できるのは嬉しい。欲を言えば、原寸大の図が1枚でも2枚でも付いていたら、と思った。

(服部 昭)



〔新刊紹介〕

あきづき空太 著

「赤髪の白雪姫」 白泉社

異例の書評であることをお許しいただきたい。本書はマンガ(コミック)であるがあえて紹介したいのは、「自立した女性薬剤師」が、「その薬学的知識をもって自らの困難な運命を解決していく」物語だからである。

本書の時代設定は中世の欧州をおもわせる架空の世界である。主人公の薬剤師白雪(しらゆき)は、その風貌による理由のみで王の愛妾となる理不尽な運命から、その化学、薬学的知識をもって逃れていく。落ち着いた先の国では「宮廷薬剤師」見習いとしてその技術と能力を高めていく。ここからはラブストー

リーの要素が高くなっていくが、それでも彼女を中心とした薬剤師の力がいくつもの問題を解決していく。このような物語である。

これは男女比で60%を占める現代のわが国の女性薬剤師にとっても身近に感じられる夢物語であろう。また将来の自立を目指す女子高校生にとっても「薬剤師」という存在を浮かび上がらせることになる作品となっている。現在8巻まで刊行。各420円

(五位野政彦)

薬史往来

私の薬史学の原点

「薬学の歴史：ファールブル、ディルマン著」

名城大・薬 奥田 潤

1977年、日仏薬学会会長であった石館守三先生の招きで、パリ大学薬学部長であったG. ディルマン先生(薬史学・薬事法規)が来日された。同先生は、薬史学・薬事法規について講演された後、名古屋へ立ち寄っていただき、内藤記念くすり博物館、名古屋城を見学された。誠実で最後までのごとを追求され、頭脳明晰で心の温かい先生であった。脚が不自由で杖をついておられた。名古屋城で転倒されびっくりしたが、大事に至らず帰国された。数年前、他界されたと聞いている。

ディルマン先生は題に掲げたように、パリのクセジュ文庫「薬学の歴史(1961)」の原著者の一人である。私と妻陸子は1962～1963年にかけて1年3ヶ月パリ大の研究所で研究していたが、フランスの薬学の歴史について学ぶ機会は殆どなかった。帰国後、友人松岡芳隆氏(故人)より同書を紹介され、私達が薬学出身であることから翻訳す

ることになった。

「薬学の歴史」には古いフランスの薬学の話が多く、その点では理解しにくく、知らないことばかりであった。薬のこと、薬剤師の前身である調剤師(アポティケール)の歴史についての記述が多かったが、1950年頃までの薬学教育も書かれていた。

翻訳の完成が危ぶまれたが、ディルマン先生に何度も手紙で質問を送り、航空使用の薄い紙に手書きやタイプで御返事をいただいて、やっと白水社から1969年に出版した。出版直後は何も反応がなかったが、本が再版されて、多くの薬学者、薬剤師の皆さんに読んでいただいたことを知り、感謝したい。

本書を翻訳したお陰で、その後の私の薬史学の研究に筋道ができ、薬史学の博物館の見学が楽しくなった。薬史学をこれから学びたいという若い研究者の参考になれば幸いである。

薬史レターへの投稿をお待ちしています

薬史に関するエピソードをはじめニュースや図書紹介などなど、会員からの投稿をお待ちしています。送り先は薬学会事務局宛てにお願いします。図書紹介は表紙をスキャンなどしてお送り戴ければ有難いです。次号(第66号)は2013年3月発行予定です。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第65号 2012年12月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 JSHP：The Japanese Society for History of Pharmacy

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel：03-3817-5821 fax：03-3817-5830 <http://yakushi.umin.jp> e-mail：yaku-shi@capj.or.jp